

# うしお

第 44 号

昭和 43 年 3 月

## 目 次

池田湖における網生簀飼育試験（42年度）	大口養魚場	1
漁場観測速報（2月分）	養殖部	14
2月の漁海況	漁業部	16
定置観測（2月分）	養殖部	18
奄美短信	大島分場	19
業務概況	編集部	20

鹿児島市城南町20番12号

## 鹿児島県水産試験場

## 池田湖における網生簀飼育試験（42年度）

大 口 養 魚 場

41年度はコイ種苗生産を主体とした飼育試験を実施して一応の成果を得たので、42年度は、ウナギを主体として試験を実施した。

網生簀養鰻については、昨年同湖で天然ビリを用いて簡単な飼育を試みたが、満足できる成果を得ることができなかった。

網生簀によるウナギ飼育は、止水式養鰻に比して単位面積当りの生産数量は、はるかに大きいことが予想され、今後、養鰻業の発展をはかるためには現状でも不足がちである種苗（養中）生産を効率的な網生簀で行うことが良策であろうと考えられる。しかし網生簀によるウナギ種苗生産については、これから諸問題点が多く出てくるものと考えられるが、これら問題点を一つ一つ解決して足掛りとしていきたい。

なお、本試験の遂行にあたり御協力いただいた指宿市及びウナギ養成種苗の提供をいただいた大茂養鰻場、九工養鰻場に対して謝意を表する。

### 1 試験方法の概要

#### (1) 試験区分の試験期間

##### コイ種苗生産

A区 青仔（小） 42年7月21日～11月1日

B区 青仔（中） 42年7月21日～11月1日

##### ウナギ種苗生産

T-1区 天然クロコ 42年7月21日～8月9日

T-2区 天然クロコ 42年7月21日～11月1日

T-3区 天然クロコ 42年8月29日～11月1日

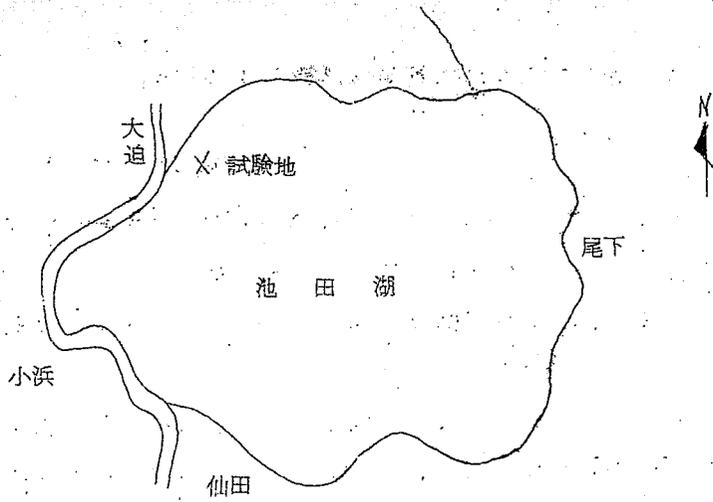
T-4区 天然ビリ 42年8月29日～11月1日

Y-1区 養成クロコ 42年7月26日～8月9日

Y-2区 養成ビリ 42年7月26日～11月1日

Y-3区 養成ビリ 42年7月26日～11月1日

#### (2) 試験場所 指宿市池田湖大迫地先



(3) 供試魚

コイ 42年5月16日大口養魚場で産卵した青仔  
 B区(平均158g)は成長がやや遅れたもので、A区(平均0.3g)は同群のなかでもつとも成長の遅れたものを選んで使用した。  
 ウナギ 天然産 川内川宮ノ城地区で採捕したもの、河川にて蓄養日数は5~15日養成、両養鰻場でシラスより養成したもの

(4) 生簀の構造および形状

生簀の構造については図に示した。

生簀網	規	格	区 分
サンライン	1.8m × 1.8m × 1.8m	18目	T-1 Y-1区使用
クレモナモジ網	" " "	4 × 4 220径	T-2 T-3 T-4
クレモナモジ網	" " "	6 × 6 180径	T-3 Y-2 A, B
クレモナモジ網	" " "	6 × 6 120径	A, B B-1 B-2
クレモナモジ網	" " "	6 × 6 80径	Y-3

(5) 放養密度

コイ A区 3000尾(平均0.3g)  
 B区 6000尾(平均158g)  
 ウナギ 小型 3000尾  
 中型 2000尾

大型 1000尾 夫々目安とした。

(6) 給 餌

コイは昨年1日4回給餌したが、今年は3回給餌にとどめた。

ウナギは餌付初期には1日2回行なつたが、その後は午前中1回行なつた。

(7) 餌 料

コイ、ウナギ何れも市販配合餌料のみを使用した。添加剤としてフィードオイルを使用した。

2 環 境 調 査

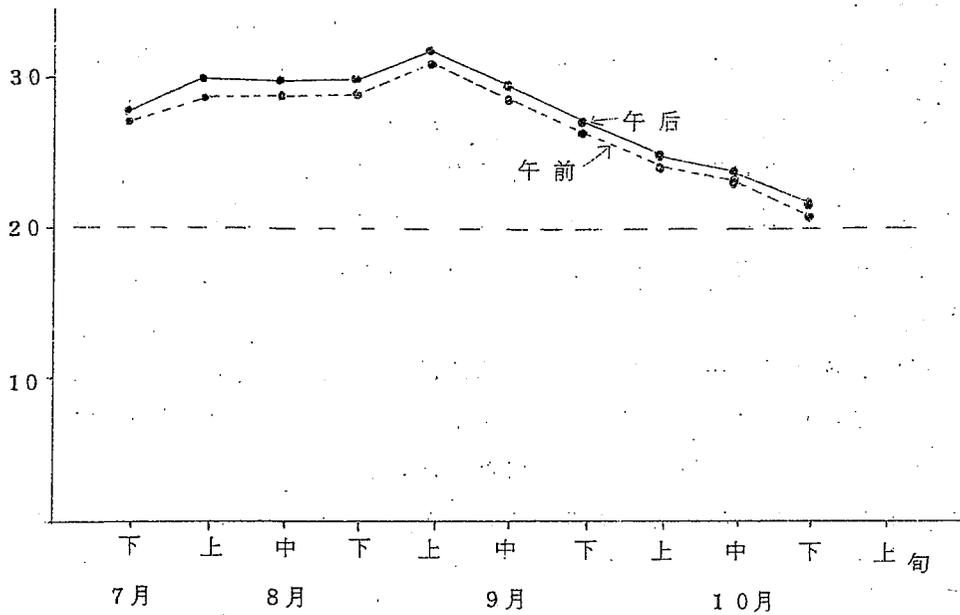
(1) 透 明 度

生簀周辺は昨年同様は5~7mで変化は見られなかつた。

(2) 水 温

期間中の午前、午後の旬別平均水温は第1図に示した。

第1図 午前、午後水温旬別変化



3 結 果

I コイ種苗養成

(1) 減耗状況

期間中の旬間死魚数は第1表のとおりである。

第1表 旬間の死魚数変化

期 間	A 区	B 区	計	百 分 比
7月22日～ 7月31日	813尾	944尾	1,757尾	64.5%
8月 1日～ 8月10日	110	74	184	6.7
8月11日～ 8月20日	42	58	100	3.7
8月21日～ 8月31日	46	27	73	2.7
9月 1日～ 9月10日	472	25	497	18.2
9月11日～ 9月20日	14	1	15	0.6
9月21日～ 9月30日	15	14	29	1.1
10月 1日～ 10月10日	2	8	10	0.4
10月11日～ 10月20日	4	5	9	0.3
10月21日～ 10月31日	16	34	50	1.8
計	1,534	1,190	2,724	100

期間中の減耗数の変化は、昨年傾向とほぼ同様であり、放養後10日間のスレによるものが全体の64.1%と非常に高い。

これはやはり環境変化による不慣れのために起るものと考えられる。

その後の減耗は、エラぐされ病等主として細菌感染症によるものと考えられるが、これらの症状に対しては、ロメジンソーダ1～2g/kgの投薬が著効を現わした。

A区で試験中期に一夜にして多数の死魚が認められたが、これも細菌感染によるエラぐされが主原因と考えられるが、このような特異現象の起因がどこに存在するものか、今後検討しなければならない。

このことは、網生簀の場合常に細菌感染を受けやすい環境下にあるものと思料されよう。

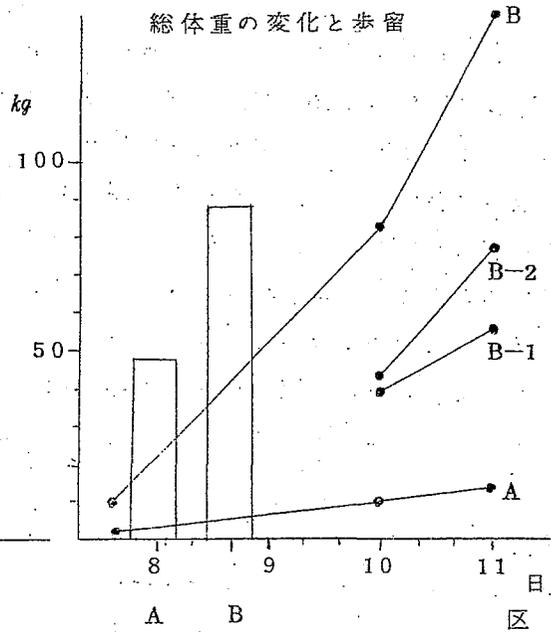
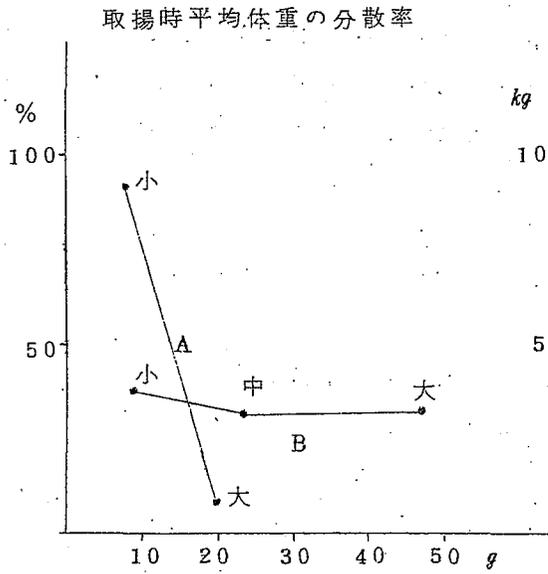
(2) 結 果

A 区 の 成 績

期 間		7月21日~ 9月30日	10月1日~ 11月1日	7月21日~ 11月1日
飼 育 日 数	日	72	32	104
	網生簀水容積 <i>m</i> <sup>3</sup>	4.5	4.5	4.5
A	放 養 尾 数	尾 3,000	1,575	3,000
B	取 揚 尾 数	尾 1,575	1,411	1,411
B/A	尾 数 歩 留	% 52.5	89.6	47.3
C	確 認 死 魚 数	尾 1,512	22	1,534
D	不 明 魚 数	尾 +87	-142	-55
E	放 養 重 量	<i>kg</i> 1.0	9.25	1.0
F	取 揚 重 量	<i>kg</i> 9.25	11.7	11.7
F-E	増 重 量	<i>kg</i> 8.25	2.45	10.7
F/E	増 重 比	9.25	1.26	11.7
G	放 養 時 平 均 体 重	<i>g</i> 0.3	5.9	0.3
H	取 揚 時 平 均 体 重	<i>g</i> 5.9	8.3	8.3
H/G	個 体 増 重 比	19.7	14.0	27.7
I	<i>m</i> <sup>2</sup> 当り放養尾数	尾 925.9	486.1	925.9
J	<i>m</i> <sup>2</sup> 当り取揚重量	<i>kg</i> 1.62	3.61	3.61
K	<i>m</i> <sup>2</sup> 当り放養尾数	尾 666.7	350	666.7
L	<i>m</i> <sup>2</sup> 当り取揚重量	<i>kg</i> 2.06	2.6	2.6
M	投 与 餌 料 量	<i>kg</i> 177.9	100	277.9
F-E/M	餌 料 効 率	% 46.4	24.5	38.5
M/F-E	餌 料 係 数	2.15	4.0	2.59

B 区 の 成 績

区 分		B	B - 1	B - 2	B	
期 間	日 数	7月21日~ 9月30日 (72)	10月1日~ 11月1日 (32)	10月1日~ 11月1日 (32)	7月21日~ 11月1日 (104)	
	網生簀水容積	m <sup>3</sup>	45	45	45	45
A	放 養 尾 数	尾	6,600	3,716	1,730	6,600
B	取 揚 尾 数	尾	546	3,612	1,697	5,309
B/A	尾 数 歩 留	%	82.5	97.2	98.6	80.4
C	確 認 死 魚 数	尾	1,143	47	7	1,197
D	不 明 魚 数	尾	-11	-57	-26	-94
E	放 養 重 量	kg	95	395	437	95
F	取 揚 重 量	kg	83.2	53.2	78.3	117.8
F-E	増 重 量	kg	73.7	13.7	34.6	98.3
F/E	増 重 比		87.5	13.4	1.79	12.4
G	放 養 時 平 均 体 重	g	158	106	265	158
H	取 揚 時 平 均 体 重	g	153	147	462	222
H/G	個 体 増 重 比		96.8	136	174	141
I	m <sup>2</sup> 当り放養尾数	尾	2,030.7	1,147	534	2,030.7
J	m <sup>2</sup> 当り取揚重量	kg	256	164	242	363
K	m <sup>2</sup> 当り放養尾数	尾	1,466	8,257	3,844	1,466
L	m <sup>2</sup> 当り取揚重量	kg	185	118	174	262
M	投 与 餌 料 量	kg	1,148	345	397	1,890
F-E/M	餌 料 効 率	%	65.0	39.7	87.1	52.0
M/F-E	餌 料 係 数		1.56	2.51	1.15	1.92



### (3) 考 察

#### ア、放養密度について

昨年の結果から  $m$  当り 400~500 尾が適当であつたが、今回は 3 倍に当る  $m$  当り約 1,500 尾も放養して歩留りは 80.4% と高率であつた。体重分散率は B 区では平均 461g のものが約 30%, 平均 225g のものが約 30%, 平均 88g のものが 4.0% と成長の差が著しかつた。

たゞ、今年の種苗は全体の 45% 位が奇形（口曲り下顎部の肥大）であつたことが摂餌の困難をまねき成績を悪くした一因でもある。

いずれにしてもこのような高密度飼育は、種苗生産の一過程としては利用できても得策ではないようである。

#### イ、尾数歩留について

B 区は 33  $m$  当り 6,600 尾の放養にもかかわらず、最終歩留りが 80.4% と高率を示したことは放養時の平均体重が昨年の倍で 158g と大きかつたためと考えられる。

A 区は逆に 47.3% と低率であつた。

これは、放養時平均体重が 0.3g の小型で、しかも成育の遅れた種苗を使用したためと考えられる。

B区は、10月1日より小型区(B-1)、大型区(B-2)に分養して成績を調べたところB-1区は餌料効率が39.7%の低率を示し、B-2区は87.1%と非常に高率な値を示した。このことは、実際の飼育に当つても成長に従つて適宜選別を行う必要があることを示している。

選別時期については、出荷時期、サイズを考慮して行う必要があるが、体重分散率からみて種苗価値の著しく劣る群についてはこれを早目に除いて餌料効率等の向上をはかるべきであろう。

たゞし、成長不良の原因が体質的な先天的のものであるか、放養密度等の後天的のものであるかの判定については、実際にはなかなか難しい点もある。

網生養によるコイの種苗養成は歩留り、成長も比較的良好で単位生産量も止水池のそれよりはるかにすぐれていると言えるが、今後の研究課題としては減耗数の60~65%を占める初期減耗の予防対策が残されているため更に追究してゆきたい。

## II ウナギ種苗養成

### (1) 減耗状況

期間中の旬間死魚数は第1表のとおりである。

種苗は天然産が7月21日と9月28日、養成ものは7月26~27日に放養したが、7月放養した群が概して斃死が多かつた。規格としては、小型魚ほど減耗が著しい傾向が見られた。

第1表からもわかるとおり斃死は放養初期(1週間前後)に起りしかも1日に飼育数の50%が倒れることもあつた。

原因については、網生養に対する不慣れのためか、あるいは溶存酸素の欠乏も考えられるが、今回の試験では確証を得られなかつた。

たゞ天然種苗の場合、蓄養日数の関係から魚体が極端にやせていることと、人工餌料に対する餌つきの関係で斃死することは多分に考えられる。

しかし、Y-1区のように養成種苗も同じ現象を示していることから魚体の衰弱及び餌つきと結びつけるのは妥当でないような気がする。

第1表 ウナギの旬間死魚数変化

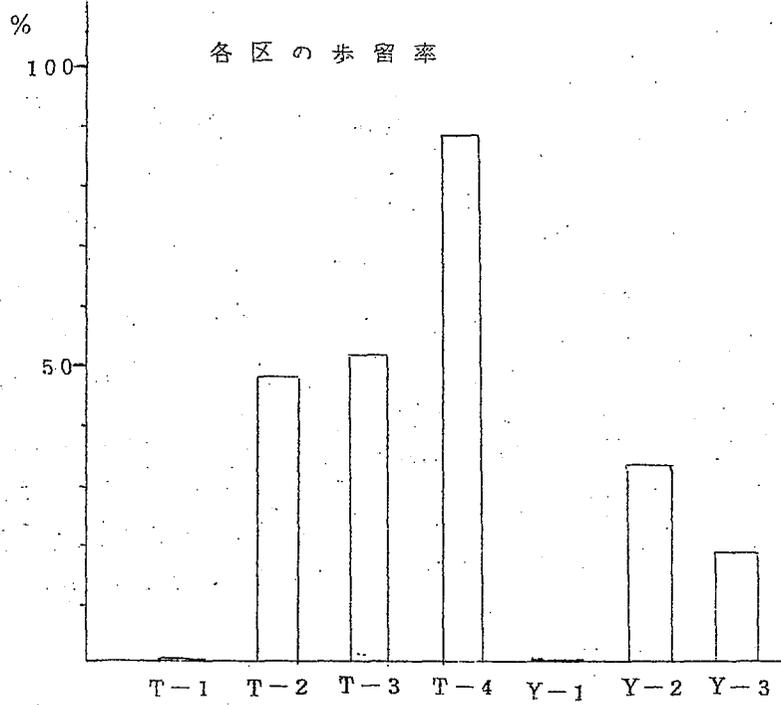
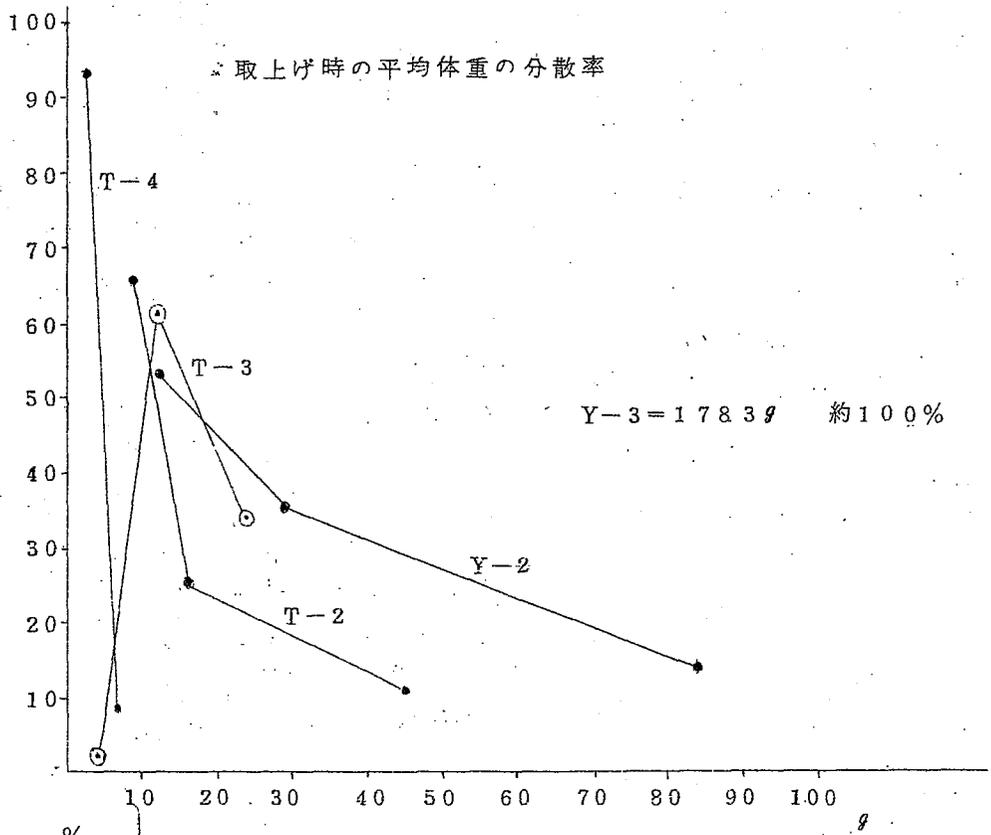
期 間 \ 区	T-1	T-2	T-3	T-4	Y-1	Y-2	Y-3
7月21日～7月31日	1,210	95			19	23	47
8月1日～8月10日	1,962	59			2,828	614	7
8月11日～8月20日		216				608	15
8月21日～8月31日		34				6	4
9月1日～9月10日		14	1,613	19		3	0
9月11日～9月20日		90	73	4		4	0
9月21日～9月30日		22	6	8		11	0
10月1日～10月10日		3	5	4		15	1
10月11日～10月20日		0	0	0		0	0
10月21日～10月31日		5	6	8		5	0
計	3,172	538	1,703	43	2,847	1,289	74

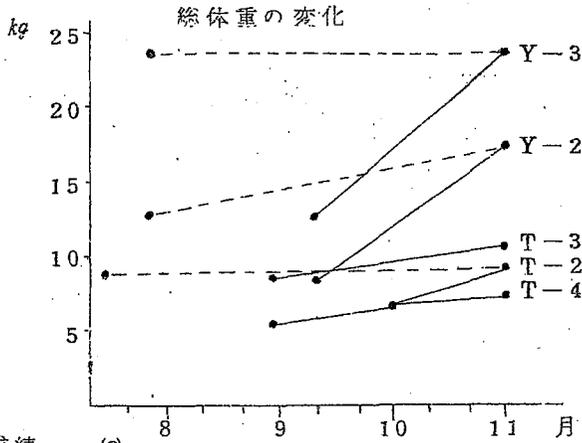
(2) 結 果

飼育成績……(1)

区 分	放 養 数 量			減 耗 数	取 揚 数 量		
	尾 数	重 量	平均体重		尾 数	重 量	平均体重
T-1	3,090尾	69kg	2.2g	3,092尾	0尾	0kg	0g
T-2	1,364	87	64	700	664	91	137
T-3	3,520	88	25	1,732	1,788	102	57
T-4	554	54	97	67	487	74	152
Y-1	2,900	73	25	2,817	83	—	—
Y-2	1,900	125	66	1,270	630	172	273
Y-3	790	280	274	656	134	289	1783

「註」 T-天然産種苗 Y-養成種苗 減耗数～死魚+不明数





飼育成績 .....(2)

区 分		T - 2	T - 4	Y - 2	Y - 3
飼 育 期 間		10月1日~ 10月30日	8月30日~ 11月1日	10月1日~ 11月1日	9月9日~ 11月1日
飼 育 日 数	日	30	64	31	53
網生質水容積	m <sup>3</sup>	4.5	4.5	4.5	4.5
A	放 養 尾 数	尾 831	尾 554	尾 643	尾 141
B	取 揚 尾 数	尾 664	尾 487	尾 630	尾 134
B/A	尾 数 歩 留	% 79.9	% 73.0	% 97.9	% 95.0
C	死 魚 数	尾 112	尾 43	尾 15	尾 1
D	不 明 尾 数	尾 -55	尾 -24	尾 +2	尾 -6
E	放 養 重 量	kg 6.6	kg 5.4	kg 11.8	kg 12.4
F	取 揚 重 量	kg 9.1	kg 7.4	kg 17.2	kg 23.9
F-E	増 重 量	kg 2.5	kg 2.0	kg 5.4	kg 11.5
F/E	増 重 比	1.37	1.37	3.18	2.07
G	放 養 時 平 均 体 重	g 7.9	g 9.7	g 18.4	g 87.9
H	取 揚 時 平 均 体 重	g 13.7	g 15.2	g 27.3	g 178.3
H/G	個 体 増 重 比	1.73	1.57	1.48	2.02
I	m <sup>3</sup> 当り放養尾数	尾 184	尾 123	尾 143	尾 31
J	m <sup>3</sup> 当り取揚重量	kg 2.1	kg 1.64	kg 3.82	kg 5.31
K	給 餌 総 量	kg 6.3	kg 23.3	kg 11.3	kg 13.3
F-E/K	餌 料 効 率	% 39.7	% 8.6	% 47.8	% 86.4
K/F-E	餌 料 係 数	2.52	11.6	2.1	1.16

### (3) 考 察

網生簀によるウナギ種苗生産に関する今年の試験は、昨年の結果からしてかなりの成果を期待して行なつたが、結果的には試験設定及び方法等に不備があったりして予想以上の不成績に終り今後の問題点を得たにとどまつた。

#### ア、放養密度について

今回は単に3.3㎡に対して小型(1~3g)3000尾、中型(3~10g)2000尾、大型(10~30g)1000尾を目安に行なつたが、減耗状況が著しく、尾数密度による差異を把握できなかつた。

たゞ斃死原因と関連して同規格のものについて異なつた密度で飼育できなかつたので、適正密度の把握のためにも今後更に追究すべきであろう。

#### イ、尾数歩留について

減耗のなかでは放養初期における斃死がもつとも多く、この原因については前にもふれたとおり判然としない。

T-1, Y-1区の如き3g以下の小型は放養後20日間位で全滅したことなどから、小型魚の網生簀養成はすべての問題が今後に残されている。

また、ウナギを網生簀で飼育する場合逃がさないことが第1条件であるが、Y-3区の場合約80%が逃逸した。

原因はモジ網の目合の拡大等ほんのわずかな間隙からの場合が多く編網を確実に行うことより、放養規格を網目よりはるかに大きくそろえて入れることが肝要である。今後逃逸防止対策としては、網目ずれや糸が切れない合成網のネトロン網等を使用する必要がある。

#### ウ、給餌率について

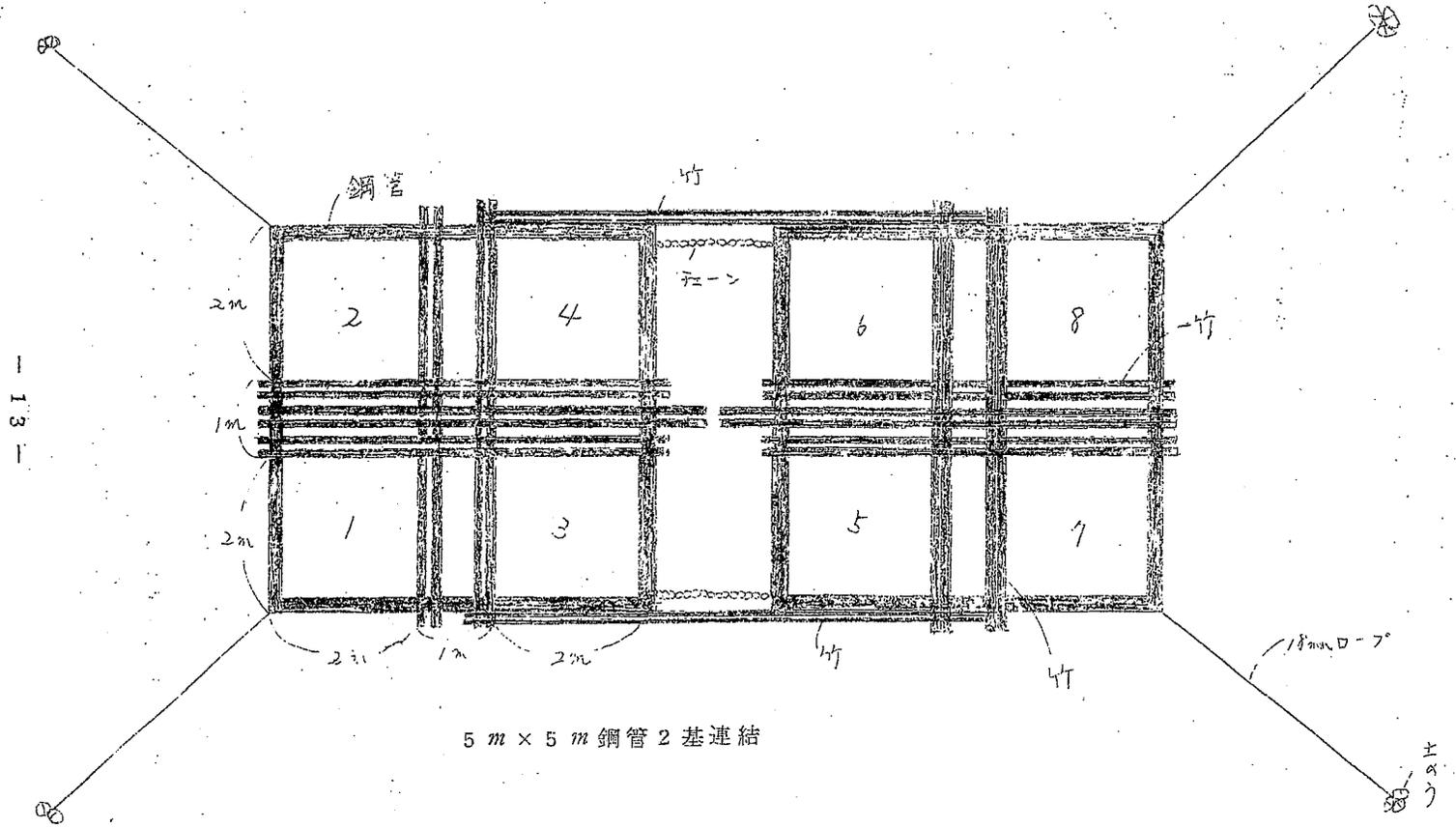
使用餌料はすべてウナギ配合餌料を用いた。

天然区については餌つきを心配したが比較的餌付きは早かつた。しかし群全体の摂餌までにはかなりの日時を要し、従つて給餌量は基準をはるかに上まわつて与えた。このことが飼育成績不良の大きな原因でもあり初期餌料効率の低下となつた。

今後給餌に関しては適正な給餌率を与えること、天然産については餌つけの餌料及び量等について考究しなければならない。

#### エ、成長について

附圖 網生簀の構造



— 13 —

池中養成した種苗は成長が良好で比較的個体差異が少ないが、天然産では個体差異が大きい。天然産は、この時期の河川採捕量が少なく蓄養日数が長くなり、肥満度が著しく低いことも餌つき後の成長が良くない原因であろう。

今回の試験から網生簀によるウナギ種苗生産についてはまだまだ問題点が多く、池中養成した中型種苗を用いて行なえば効率の高い生産が期待できるが、シラスおよび天然種苗の利用化についても今後更に問題点を解明して生産基盤を確立することが急務である。

担 当 者	水 流	実 ( 総 括 )
	小 山 鉄 雄	( 試 験 担 当 )
	児 島 史 郎	(   "   )
	下 野 信 一	(   "   )

#### 漁 場 観 測 速 報 ( 2 月 分 )

養 殖 部

- 水成川の2月の水温は、最高水温の平均が $14.31^{\circ}\text{C}$ 、最低水温の平均が $13.85^{\circ}\text{C}$ で、月間の最高水温は上旬の $14.54^{\circ}\text{C}$ 、最低水温は中旬の $13.54^{\circ}\text{C}$ であった。前月よりも $1.8\sim 2.1^{\circ}\text{C}$ 低くなっており、昨年同期よりも $1.5^{\circ}\text{C}$ 程度低目を示している。
- 福山における平均水温は、最高水温の平均が $15.75^{\circ}\text{C}$ 、最低水温の平均が $14.35^{\circ}\text{C}$ 。月間の最高水温は $15.94^{\circ}\text{C}$ 、最低水温は $14.35^{\circ}\text{C}$ で、月間の最高水温は上旬の $15.94^{\circ}\text{C}$ 、最低水温は上旬の $14.05^{\circ}\text{C}$ で、上旬から下旬にかけて水温は高目を示し、下旬には再び低くなっている。

また、前月に比して最高で0.6℃、最低で2℃低くなっているが、下降傾度は次第にゆるやかになるようである。前年同期に比して最高で0.3℃高く、最低で約1℃低くなっている。

- 全般的には下降を示しているが、その傾度は次第にゆるやかになってきている。また、福山では中旬の最低平均が一時高くなっているのに対して、水成川では中旬が低目を示し、下旬に高くなっている傾向が見られる。

長崎海洋気象台2月上旬の西日本海況旬報によると、東シナ海の海面水温は前旬にくらべ海峡附近で冷え込みが特にきびしく、黒瀬域でも1℃以上下降している。平年に比べると全域にわたり1℃以上低目を示している。

今後の海面水温はひきつゞき平年より低目に経過する見込みで寒暖の変動で沿岸や内湾では水温の急激な変化もあると思われると報じている。

観測値 旬別	水 成 川		福 山	
	最 高	最 低	最 高	最 低
上	14.54	13.89	15.94	14.05
中	13.96	13.54	15.80	15.02
下	14.47	14.13	15.51	14.08
月平均	14.31	13.85	15.75	14.35
前月差	-2.09	-1.76	-0.60	-1.96
前年差	-1.51	-1.35	+0.27	-0.96

## 2 月 の 漁 海 況

漁 業 部

### ※ 海 況

東支那海，黄海の水溫は低く，平年より1℃前後低目の海域が多いが，対馬暖流域ではヤム高目になっている。本県沿岸は平年より低く，甌海峡，枕崎近海，大隅海峡とも例年より1～2℃低目になっている。

### ※ 漁 況

#### ○ 旋 網

薩南漁場：時化の日が多く全般に低調であつた。枕崎港の状況をみると，前月よりヤム水揚量は増加したが昨年同期に比べ入港船は $\frac{1}{5}$ ，水揚量は $\frac{1}{8}$ の減少になっている。このような漁況不振は氣象の悪条件もさることながら，サバの不漁が大きくひびいている。

昨年4月以降極端なサバ漁の不漁はつよき，現在にいたるまでその回復はみえていない。

上・中旬は屋久島宮之浦沖で小サバ主体に小アジ，赤ムロの漁獲があつたが，昨年同期は大サバ，中サバ主体に1隻20屯程度の漁があつていたが，今年は5～10屯で全く不振である。

下旬に入つて湯瀬，梅吉曾根で中サバ主体に1統当り15～25屯の日も多くなりヤム上昇の兆がみえてきた。

西薩漁場：前月よりわずかに漁獲が増加した。前年同期に比べると中アジ，小サバの減少になっているが，カタクチの増加が目立っている。

甌島南からタカ島附近と牛深沖とでともにカタクチ主体(90～100%)に1統当り8～10屯で1月からひきつよいて活況であつた。

このほか下旬に甌島東で中アジ主体(70%)に小サバの漁があつた。牛深沖，野間岬西沖で若干マイワシの混獲があつた。

#### ○ ヨコワ曳網

枕崎港には前月につよきヨコワ曳網船が多く，前月より入港船，水揚量とも増加した。漁場は広く口永良部島南～屋久島南，坊岬から野間岬と甌島周辺，手打沖とである。カツオの混獲率は10%内外で少ない。

○ 定置網

甌島でのブリ定置は散発的ではあるが100~200尾の寒ブリの入網がある。内之浦は2~3尾入網した程度であつた。

○ カツオ一本釣

小型船は下旬になつて入港があり、昨年より2旬近くおけている。漁場は15~18°N, 133°E, スワノセで1隻4~10屯, 屋久新曾根ではヨコワ40~50%, シビ混りでカツオは少ない。

大型船は15~18°N, 134~138°Eで1隻50~100屯の好漁がつまらしている。

○ マグロ延縄

沖合船は19~21°N, 130~135°Eでトンボ500~1,000尾, シビ100尾内外と例年並, トンボは7~8母でやゝ小型。沿岸の小型船は喜界島東から種子島南東でトンボ80~100尾, キハダ10尾内外。

主要漁港の水揚状況

業種	漁港	43年2月		42年2月			
		隻	屯	隻	屯		
旋網	阿久根	大	32	330.3	23	133.6	
		中	21	153.3	22	77.4	
		小	0	0	13	16.2	
	串木野	9	60.8	8	142.8		
	枕崎	29	535.2	186	4256.6		
	内之浦	0	0	不	明		
カツオ一本釣	枕崎	大	34	1726.4	39	1416.1	
		小	4	124.7	8	40.4	
	山川	大	36	1700.0	36	1309.9	
		小	7	55.0	12	69.9	
ヨコワ曳縄	枕崎	約	2,500	32.6	約	260	49.6
	山川		54	9.2	15	2.4	
	内之浦		2	0.4	7	1.6	
抄網	阿久根		52	14.2	15	3.5	

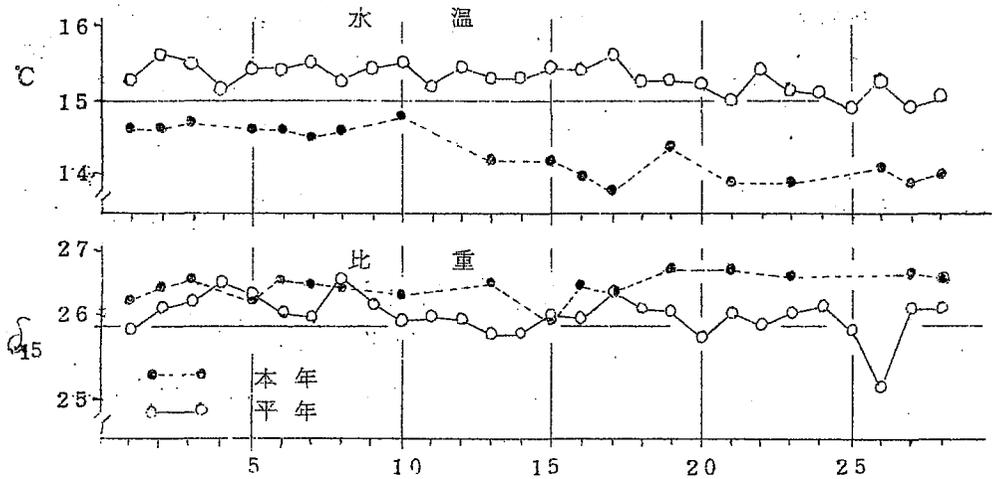
定 置 観 測 ( 2 月 分 )

養 殖 部

○ 旬平均水温・比重 (満潮時・表面)

旬	水 温 ℃				比 重 $\rho_{15}$			
	本 年	前 旬 差	前年同期差	平年差	本 年	前 旬 差	前年同期差	平年差
上	14.62	-0.61	-0.74	-0.78	26.48	-0.08	-0.30	+0.25
中	14.12	-0.50	-0.64	-1.21	26.46	-0.02	-0.04	+0.37
下	13.96	-0.16	-1.39	-1.11	26.66	+0.20	-0.10	+0.61
月平均	14.30	-1.38	-0.38	-0.98	26.52	-0.12	-0.10	+0.39

2 月 の 水 温 ・ 比 重



## 8. 住みなれてあればこそあれ綿津見の

## 離れ小島の秋の夕暮

これは、明始30年代、国学院大学に遊学して島に帰つておられた先覚者、主持綱安氏が、その友人柳田国男氏に贈られた詠草であると言う。

現在、日本で南の果てから二番目の島が沖永良部島で、鹿児島から南西へ310哩、船で約27～28時間でこの島に達することができる。東経128度25分、北緯27度23分（測点、伊延）に位置し、北東～南西へ琵琶形にのび長さ20km、周囲53km、面積101km<sup>2</sup>の小さな島ではあるが、他の島々と比べて自然的にも、人間的にも何となく異なるふん囲気が漂う中で、太平洋と東シナ海に囲まれて、北方に徳之島、南方に与論島、沖縄島をも見ることができる。

島の中央に古生紀層からなる二つの高点がある。他は大部分が隆起珊瑚礁でおおわれた平坦な台地で、その殆んど大理石化した珊瑚礁の中に多数の化石を見出すこともできる。沖永良部島の古期珊瑚礁は第三紀にあたるもので、二段の段丘が見られ、最高段（180～140m）の地域は侵蝕が進み、無数のドリネが見られ、1,000余りにも達するであろうと言われており、上段はドリネの窪地に堆積した土じょうを利用して畑と落葉科植物の混合体、傾斜地は雑木帯、下段の100～20mの緩斜地は本島の生産地帯で、やはり一部ドリネの発達を見て畑地として利用され、飲料水との関係からも、集落も殆んどこの地域に散在している。そして、20m内外から海岸線までは新期の珊瑚礁で一部は耕地になつたり草地及び荒地となつているが、汀線下には裾礁が広く発達している。そのため、和泊及び知名港では本船は沖合に碇泊する。だから、上陸の時都市交通等では全く味わえない様な経験ができる。それはある意味では離島苦の一つであるかも知れない。その様な島ではあるが、歴史的には西郷南洲翁が文久年間に一ケ年余りの星霜を幽因裡に送られた島であつたり、秋吉台をしのぐとも言われる大鍾乳洞があつたり、又、核の傘の最先端であるかも知れない米軍のレーダー基地のある島であり、夏には本当の暑さを味わい、冬1月下旬には桜、百合、スミレ、菜の花等が咲いて一足早い春を見ることができる。そして、本当の春になり今年も又

多くの若い人達は不安と希望の中で家族や自然に別れを告げ、教室や職場を離れては時に美しかった自然を想うのであろう。

先の歌の心情を察した柳田国男氏は島を訪れ旧友を慰めようとはるばる鹿児島に下つて沖永良部島行の船に乗つたのであるが、あいにくの時化で山川港に数日避難滞留したので渡島を諦め

山川の五百重八重潮越え来れど

なおはるかなり君が住む島

と書き送つて東京へ引返したと言う。二つの歌は過去も現在も殆んど変ることのないあるものゝ気持かも知れない。

( I . カサゴ記 )

## 業 務 概 況

### § 本 場

#### 漁 業 部

- 3月1～12日 海洋観測 ヨコワ漁場調査(かもめ)
- 3月8日 調査船「さつなん」起工式(新瀨)
- 3月11～12日 南西海区漁海況予報会議出席
- 3月14～15日 西海区漁海況予報会議出席
- 3月21日 鹿児島県沿岸の重要魚種の長期予報発表

#### 養 殖 部

○ ノリ関係

\* 養殖試験

アサクサノリ，マルバアサクサノリ，スサビノリの3品種につき谷山七ツ島海岸で引続き養殖比較試験。

3月15日 3回日本張り，水位別生育比較試験

3月29日 水位別生育比較試験

\* 糸状体培養指導

3月12日 出水市

3月15日 谷山

3月22，23日 鹿屋，垂水市

\* アワビ，トコブシ餌料種別飼育試験

ハバノリ，アオサ，ホンダワラの餌料種別飼育試験を前月に引続き大崎鼻において実施中。

○ 真珠漁場観測

大崎鼻地先の真珠漁場観測を7日間隔で引続き実施中。3月下旬急に夜光虫が増殖し赤潮現象を呈してきた。ポリドラ幼生もかなり見え始めた。

**製 造 部**

○ ハマチ鮮度保持試験

活魚輸送範囲の設定に当り前提条件となる鮮度保持可能な限界を求めるため保管温度差による硬直維持時間を刺殺魚につき観察した。

○ ワカメ処理試験

素干ワカメ製造時のハマトビムシ住管除去のため炭酸マグネシウム使用による防除効果を検討した。

○ ハマチ，コイ，カジオくん製試験

○ コイこく企業化製造試験

○ 先進地技術調査

技術導入を目的とし，沼津市におけるムロアジ開干の製造実態並びにワカメ加工について島原市（塩蔵ワカメ，もみワカメ）及び島根県（板ワカメ）につき調査した。

○ 活魚流通調査

鮮度差による養成ハマチの価格変動を消費市場（福岡，熊本，大阪）につき調査した。

**調 査 部**

○ クルマエビ餌料予備試験

2月に引続き人工配合餌料開発のための予備試験を実施中。

○ 養魚場適地調査

3月1日，垂水市牛根地先においてハマチを目的とした養魚場適地調査を実施。

○ 会議出席

\* 42年度指定研究報告並びに43年度計画検討会

（水産庁，東京 3月3日～9日）

\* 指定水域調査打合せ

（経済企画庁，東京 3月12日～18日）

\* 42年度澱粉汚水処理対策調査会

（於 共済会館）

\* 鹿児島県漁業審議会

（於 産業会館）

§ 大島分場

**庶 務 係**

- 2月15日 鹿大今井教授来場，同16日名瀬向け出発。
- 2月20日 県警本部長一行来場。
- 2月29日 重田侍従御一行来場。
- 3月9日 大蔵省主計官外1名，自治省係官，大島支庁長来場。
- 3月19日 警察庁係官，県警備部長一行来場。
- 3月26日 茂野本場長来所，同27日沖永良部へ出張。

## 漁業係

- 2月20～24日 各種資源調査(笠利, 龍郷方面)
- 3月12日 海洋観測
- 3月中旬 改良底待網投入(宇検)

## 製造係

- ナマコ分布, 利用状況調査(笠利, 大和)
- アオノリ加工試験。
- 加工場棚, 乾燥室竹材取替作業及びセイロ修繕。

## 養殖部

- アコヤガイ成長測定。
- マベ稚貝成長測定及びマベ養殖管理。
- 餌料生物培養。